

[シリーズ]

PISA型読解力 について考える

第6回



小澤由美先生

神奈川県立追浜高等学校

「受信する→考える→発信する」に重点を置いた
PISA型読解力向上の取り組み

生徒参加型の授業を通じて、能動的な学習を促す

神奈川県立^{おっぴま}追浜高校では2007年度から3年計画で、全校を挙げてPISA型読解力向上に取り組んでいる。今回は、全学年・全教科でPISA型読解力向上授業を導入する際の考え方や取り組み、日本史Bでの実践例について話を伺った。

- 「解釈」「熟考・評価」を
- 「考える→発信する」と捉え
- 全学年・全教科でPISA型読解力を向上

神奈川県立追浜高校は、2007年4月に神奈川県のパISA型読解力向上実践研究校の指定を受けた。

PISA型読解力は、①情報の取り出し②解釈③熟考・評価の3段階であるが、それを横浜国立大学高木展郎教授は「受信する→考える→発信する」と捉えている。追浜高校でもこの高木教授の捉え方を受けて、特に「考える→発信する」に重点を置いた授業を展開している。

実践研究の中心となっている総括教諭の小澤由美先生は、「そもそもこの取り組みが、県から提示された研究事業を引き受けることで始まったのです」と言う。「特定の教員だけではなく学校全体で取り組めるもの」との観点からPISA型読解力向上を選んだ。

同校では、観点別評価導入をきっかけに、授業やテストでも、思考力、判断力、資料活用能力などを伸ばす取り組みを行っていたため、PISA型読解力向上に取り組みやすいと考えたからだ。

しかし、当時、多くの教員は「PISA型読解力」という言葉は知っていても、具体的にどのような力なのか、どの

ような授業によって育成できるのかは、ほとんど知らない状況であった。そこで初年度の2007年度は、教員間でのPISA型読解力に関する研究を行い、理解を深めることからスタートした。高校でのPISA型読解力向上の取り組みは少なかったため、PISA型読解力向上研究の先進校である横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校の研究授業参観などを通じて理解を深めた。

校内では、4月・10月・2月に研修会を開き、「追浜高校にふさわしい読解力向上プログラム」について検討した。

その結果、たどり着いたのが「受信する→考える→発信する」に重点を置いた授業である。それは、生徒が自ら筋道を立てて考え、その内容を発信する力を伸ばすことを目標にした「参加型授業」の実践である。

「PISA型読解力向上における①情報の取り出しや、②解釈を丹念に行うためには、生徒に対する設問の立て方、生徒の発言に対する問いかけの仕方や内容など、教員のハードルも高くなります。全教員が取り組むこともあり、まずは教員が構えず、やりやすい方法で行うことにしたのです。『PISA型読解力向上』が即『参加型授業』ではないと思いますが、参加型であれば、どの教科でも取り組みやすいと考えました。

本来は、基礎的・基本的な知識の育成（習得型教育）と自ら学び、自ら考える力の育成（探究型教育）の両方を身につける授業が理想的ですが、残念ながら、現状は習得型の授業に重きが置かれています。両方を総合的に育成する鍵は、いかに生徒を授業に参加させるかにあると思います。一般的に言って、教師が一生懸命教えても、生徒には『受け身的・一方通行的詰め込み・BGM』と受け止められて

<資料1> 英語科「リーディング」の授業実践内容

実施時期		前期(4月~10月)		
指導目標		<ul style="list-style-type: none"> ・テキストの内容や形式などの解釈や理解・評価する力を、パラグラフリーディングスキルを通して身につける。 ・テキストの内容を要約する力を身につける。 ・目的に応じた自分の意見を述べたり、書いたりする力を身につける。 ・様々な視点から作者の心情や意図を理解し、その文化的・歴史的背景を積極的に調べる態度を身につける。 		
時期	指導単元	指導内容	指導上の留意点	
前期	4月 Lesson1 エッセイ	<ul style="list-style-type: none"> ・主題文と支持文について学ぶ。 ・パラグラフごとにテキストの内容を理解する。 ・テキストの内容を要約する。 ・設定したトピックに関し自分の意見を書く。 	パラグラフの構成をよく理解させる。トピックセンテンス、サポーティングセンテンス(支持文)、コンクルーディングセンテンス(まとめ文)を指摘できるように練習する。	
	5月 Lesson2 説明文	<ul style="list-style-type: none"> ・指示・代用表現について学ぶ。 ・上記と同様 	文と文の結びつきや流れを、指示表現を注意して読む練習をする。	
	6月 Lesson3 評論文	<ul style="list-style-type: none"> ・連結表現について学ぶ。 ・上記と同様 	文と文の結びつきや流れを、連結表現を注意して読む練習をする。	
	7月 Lesson6 説明文	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグラフの展開(比較・対照)について学ぶ。 ・上記と同様 	パラグラフの構成パターンをよく理解させる。比較対照、原因結果、時系列等。	
	9月 10月 Lesson 10&12 伝記	<ul style="list-style-type: none"> ・話の展開を予測する。 ・気持ちの変化を読み取る。 ・Lesson12の内容について、英文エッセイを書く。 ・上記と同様 	伝記は時の流れに沿って、話をまとめられるように練習する。また、話題の中心人物に関して細かく分析し、読み取った人物像に関しエッセイの構成に気をつけて英文エッセイを書く。	
	総合	Newsbreaks	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグラフの構成に注意しながら読む。 ・パラグラフごとに要約する。 ・テキストについての質問に的確に答える。 	序論、本論、結論という英文のパターンに注意しながら、パラグラフごとにタイトルをつけるとともに要約する。

2008年度PISA型読解力向上の授業実践報告書(前期)より

いる面もあります。この状況を打破し、生徒の主體的な学習を促すためにも、参加型授業に取り組もうと考えたのです」(小澤先生)

参加型授業導入が「追浜式」

2年目の2008年度は、「英語」はリーディング、「数学」は数学Ⅱ、「国語」は国語表現Ⅰや現代文、「理科」は地学、「地歴」は日本史B、「情報」は情報Cなどの教科・科目で生徒参加型の授業に取り組んだ。それ以外の科目については、「授業の最後に学習した内容を要約させる」「自分の意見を書かせる」などの方法で全教科、前期1回、後期1回以上行うことを目標とした。

例えば、「英語」<資料1>は、単語や文法を学習するだけでなく、英語の文章の論理展開を意識してパラグラフを読解するほか、テキストの内容を要約する、内容に対する自分の意見を書く、グループで意見を交換する、という内容である。教材は、教科書以外にオバマ大統領の就任演説や、コンピュータの使用による健康への影響に関するパンフレット(英文)など、実際に社会の中で使われている英語を取り上げた。

「数学」では、「解法をグループ討議させる」「解き方を教え合う」授業を行い、「国語」では、生徒が着目した新聞記事を要約した上で自分の意見を3分で発表するというスピーチコンテストの開催、「情報」では、著作権や情報

セキュリティーに関して自分の考えを論述させたほか、「携帯電話は小学生に必要か否か」「宇宙開発は税金の無駄遣いか否か」などのテーマについてディベートした。その際、インターネットによる情報収集や、パワーポイントを使って資料を作成した。

このように、音楽や保健体育などの教科も含め、各教科で工夫を凝らした授業を行った。

全校でPISA型読解力向上に取り組んだ結果、課題も出てきた。「PISA型を意識した授業、参加型授業は、今までの講義型授業に比べて授業時間が多く必要」「準備も大変」「時間が足りない」など、授業時間の不足、準備の大変さを指摘する声だ。しかし、教員がお互いの授業を見合う機会が増えたり、ビデオを使っての授業研究を行ったりするなど、授業改善につながる動きにもなっている。

【日本史】

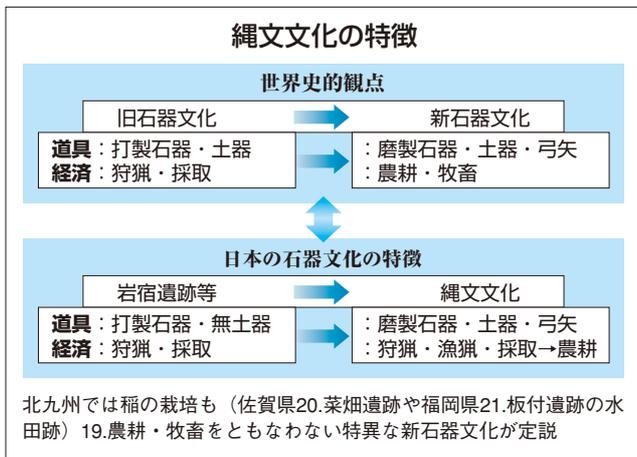
- パワーポイントを使って発表することで
- 要点をまとめる力、考える力、
- 意見を述べる力を向上

次に、日本史BのPISA型読解力向上授業について見てみよう。まず、小澤先生は年間を通してパワーポイントを使用した授業を実践した<資料2>。

「ただ板書を写させるような授業ではなく視覚に訴えるパワーポイントを使って授業を行うことで、複雑な内容を



<資料2>小澤先生作成のパワーポイント「縄文文化の特徴」



構造的に図式化してわかりやすく整理できます」とメリットを挙げる。さらに、パワーポイントで示した図式から読み取ったことを文章で書かせるなどして、情報を読み取り表現する力の向上を図った。

参加型授業としては、生徒を5人ずつ8つのグループに分け、時代の区切りごとに、授業のまとめやその時代に関することを調べて発表させた。

発表の手法は、パワーポイント、模造紙、紙に書いたものをPDFファイルにしてプロジェクターで映すなど何でもよいことにしたが、実際には日本史の授業でパワーポイントを使用しているためか、ほとんどのグループがパワーポイントを使ったという。「どのグループも、熱心にパワーポイントで資料を作成しました。アニメーション機能を駆使するなど、私が驚くほどの技術を使って作成する生徒もいましたし、自作のイラストを挿入する生徒もいて、生徒の新たな才能を発見することもありました」（小澤先生）

発表の内容については、教科書の内容をまとめる程度のグループもあったが、古墳時代のグループは神奈川県内の古墳について調査してまとめるなど、高度な内容を発表したグループもあったという。また、「授業は定説が中心になりますが、生徒の発表ではさまざまな説を紹介したグループもありました」（小澤先生）

評価は、グループごとに、調査・パワーポイント作成などの取り組みの熱心さ、発表の内容、プレゼンテーションの3つの観点で行った。プレゼンテーションについては発表の仕方に差があり、課題として残った。ちなみに生徒のパワーポイントの作品は、今年の3年生の授業でも活用する予定である。

パワーポイントを使った授業だけでなく、授業や定期テストにおいて論述問題を出し、生徒の読解力向上を図った。

<資料3>日本史の論述問題の例

- ・大和政権の成立過程は、国内外にしっかりとした資料（史料）がないため、その時期・過程等をはっきりとしたことは言えない。しかし、その過程をさまざまな資料を使い、推測することは可能である。いくつかの遺物や文献史料を使い、大和政権の成立過程について知っていることを述べなさい。
- ・「大王は神にしませば赤駒のはらばふ田井を都となしつ」の歌や、藤原京、平城京の形態や成立の過程、などを用いて、隋・唐からの影響をふまえながら、律令体制の確立について思うところを述べなさい。
- ・国分寺建立の詔等の史料を用いて、奈良時代にとって、仏教とはどのような意味を持つのか説明しなさい。
- ・元寇に関する資料を見て鎌倉時代の対外関係について知っていることを述べなさい。
- ・17世紀以降の欧米諸国のアジアへの進出は、日本にどのような影響を与えたか。その後の対外関係や支配構造の変化と関連づけて説明しなさい。

例えば、「藤原氏の系図を使い、外戚政策について知っていることを述べなさい」など、その時代全体を見通さなければ答えられないような課題とし、資料などを使い根拠を挙げながら論述するものとした<資料3>。

生徒へのフィードバックは、「本当は1人ひとりにコメントをつけて返却したいのですが」としつつも、時間的に難しいため、返却時にポイント解説を行っている。「その際、私が作成した解答と一緒に、よく書けた生徒の模範解答を紹介したりしました。学年末まで数回にわたり論述させたことで文章を書く力は確実に向上していると思います」（小澤先生）

このような小澤先生自身の日本史Bの取り組みは、新学習指導要領で目指す方向とも重なっている。小澤先生は、「受け身的に授業を聞くだけでなく、自分で考え、自分の言葉でまとめ表現することで、生徒もモチベーションを高め、興味・関心を刺激し、生徒が自ら学習することができれば、自ずと知識の獲得にもつながると思います。社会に出れば自分の意見を述べ、プレゼンテーションする機会も増えますので、授業で自分で考えをまとめ、発表することの重要性を考えさせたい」と話し、引き続き、国立教育政策研究所の研究事業（2009年、2010年）として取り組む予定だ。

- 参加型授業は生徒の興味を喚起し
- 能動的な学習態度を身につけるのに効果的

2008年度生徒に対して行ったアンケートの自由記述の感想<資料4>を見ると、能動的な学習の面白さに気づいた様子や、この取り組みが、生徒自身が自分で考え、表現する力をつけるのに有効であることに気づいた様子がうかがえる。

<資料4> 2008年度生徒に対して行ったアンケートの結果より（自由記述欄）

<p>1年生</p>	<p>のにも分かりやすくするために表現する力は重要なのだと感じた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人の前で自分が調べたことなどを発表すると、ただ勉強するよりも覚えるのがはやくなっただと思いました。 ・今までは先生の板書を写してそれを覚えるだけでしたが、自分から調べる事で覚えやすく、またその知識を自分のものにできるので良い事だと思う。 ・生徒の発言をする場が多く用いられ、宿題が面倒だったけど、ためになる授業だと思った。 ・自分で考える授業は頭を使っている感じがして疲れたけど、「力」はついているのかな…と思いました。現代、形にとらわれずに発 	<p>想・想像を豊かにしていくのは必要なことなのでこれからも続けていってほしいです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学受験だけでなくその先の将来をふまえて実施していることがわかった。 ・自分で考えて表現する機会があったため、思っていることを人に伝える力がついたと思います。授業を受けているだけでは理解できなかったかもしれないかもしれないけど自分であわすことで身についたかがわかる気がします。 ・自分たちが参加する形の授業なので、中学と違って新しい授業だと思う。これからの生活にもここで身につけた力が使われていくと思う。いろんな力も付いてきた。
<p>2年生</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・たまにやると斬新で面白い。意識して取り組むと自分のレベルや他人との相違を知れるのもおもしろい。 ・去年と比べると「PISA型」の方が授業に参加している気持になる。あと、学ぶことで社会勉強にもなると思います。 ・今まで受動的に授業を受け過ぎていた気がする。主体的に考えて書く力をつけたいと思った。 ・意見の交換をすることによって、自分とは違ってこんな風に考えているんだ!!と新たな発見ができた。一つのことだけでなく幅広く 	<p>考えることは大切だと思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・追浜がPISA型「読解力」の指定校に選ばれているので、表の面のような事をやらなければならないが、やる時間を作ることで、教科書の範囲が終わらなくなるという事態が起きるのはあまり思わしくない。 ・ただ先生の話や話を聞くだけでなく、そこから生徒自身が考え、表現するのはとても良い授業だと思う。考える力もただ板書を写すよりよっぽど身に付くと思います。
<p>3年生</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・英語の段落ごとの要約は速読力がつくと思う。これは今後続いてほしいなと思った。 ・理科の授業では、日常で使われている物について触れたりして面白い。PISA型「読解力」の向上という点ではよいと思う。 ・いつも受け身だった授業と違って積極的に受 	<p>けることができ、話す、書くことに抵抗があまりなくなった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループでの取り組みは、参加してくれない人もいるし、余計な時間がかかって退屈だと思う。

「1年生は、入学当初からPISA型読解力向上授業に取り組みますから、これが追浜高校の授業として抵抗なく受け入れてくれるようです。アンケートの中には大学受験への影響を危惧するなど否定的な意見もありますが、多くの生徒が肯定的な感想を書ってくれたので、今後につなげる自信になりましたし、やってよかったと感じています」
(小澤先生)

研究事業最終年度である2009年度は、研究授業週間を設けて、教科内や教科を超えて教員が授業参観を行って授業改善につなげたり、校外外に呼びかけて公開研究授業を実施する予定だ。

「本校の読解力向上プログラムは、厳密な意味でのPISA型読解力向上ではないかもしれませんが。しかし追浜高校の生徒は、興味が持てれば自分で勉強します。私たちは、生徒が教科に興味や関心を持ち、自分の頭で考える生徒になって欲しいと思っています。その点で、参加型授業で『論述』したり『発表』したりすることに重点を置いた読解力

向上の授業は成功したと考えています」と、小澤先生は成果を実感している。

神奈川県立追浜高等学校（全日制課程）

◇所在地：237-0061 神奈川県横須賀市夏島町13

◇創立：1962年（昭和37年）

◇学級編成：各学年6クラス 総生徒数716名（2009年4月現在）

◇特色

「文武両道」と「独立自主」を校訓とする。毎年90%程度の生徒が大学や短期大学に進学する進学校であるが、体育祭、文化祭、合唱コンクール、球技大会、耐寒マラソンなど学校行事が多く、また、部活動への取り組みや、ボランティア活動、地域貢献活動にも力を入れている。

前期・後期の2学期制とし、1コマ90分の授業を導入。また、キャリア教育に力を入れ、1・2年生対象の大学教員によるキャリア模擬授業（出前講座）などを実施している。なお、定時制課程も設置されている。

◇卒業生の進路：（2009年3月卒業）

- ・卒業生235名
- ・進路：大学進学者数188名 短期大学・専門学校進学者数14名 就職2名、進学準備など31名